## 六本木未会議

### デザインとアートと人をつなぐ街に

**のん** 映画監督 / 俳優 / 創作あーちすと Non / Film Director / Actor / Artist



# CREATOR N° 134

#### のん Non

1993年兵庫県生まれ。 2016年公開の劇場アニメ「この世界の片隅に」で主人公・すずの声を演じ、第38回ヨコハマ映画祭「審査員特別賞」を受賞、高い評価を得る。

2019年 1年半の軌跡を追った映画製作ドキュメンタリーYouTube Originals 『のんたれ (I AM NON)』と初監督映画「おちをつけなんせ」、劇場アニメ「この世界の (さらにいくつもの) 片隅に」が公開。

2020年 「星屑の町」、「8日で死んだ怪獣の12日の物語」、主演映画「私をくいとめて」が公開。

2017年に自ら代表を務める新レーベル『KAIWA(RE)CORD』を発足。シングル『スーパーヒーローになりたい』『RUN!!!』とアルバム『スーパーヒーローズ』をリリース。2019年にはミニアルバム『ベビーフェイス』、デジタル配信限定シングル『わたしは部屋充』をリリース。2020年2月にはのん主催のフェス『NON KAIWA FES vol.2』を無観客で実施し、同年3月MTVにて「のんおうちフェス」として放送。2020年5月よりオンラインライブ「NON OUCHI DE MIRU LIVE (のんおうちで観るライブ)」を積極的に開催。2021年12月には、「のんザウルス in Zepp Tokyo 1st Last LIVE」を閉館直前のZepp TOKYOで開催し大成功を収める。

創作あーちすととしても活動を行い、2018年に自身初の展覧会『'のん'ひとり展-女の子は牙をむく-』を開催。

2020年ジャパンSDGsアクション推進協議会により、SDGs People第1号に選出。SDGs認知拡大のためにキャラクター制作などを行っている。

2021年『YOKOHAMA ART STATION project 2020』『やんばるアートフェスティバル2021-2022』に大型作品展示。 2022年2月25日に、自身が脚本・監督・主演を務めた映画「Ribbon」公開予定。



published\_2022.2.16 / photo\_tada / text\_akiko miyaura

芝居、アート、音楽。さまざまな世界に生き、その時々に異なる色を放つ、のんさん。役者、創作あーちすとといった肩書きはあるけれど、そこには境界線はなく、すべてがのんさんというひとつの作品になっているようです。そんな唯一無二を地で行く稀有な存在である彼女が手掛けた、自身初の劇場長編映画『Ribbon』が2022年2月25日に公開。その構想の種のひとつとなったのが、東京ミッドタウン・デザインハブで行われた『ゼミ展2020見のがし卒展』だったと言います。映画への思いはもちろん、『見のがし卒展』で感じ取ったこと、コロナ禍において不要不急と言われたアートやエンタメに携わる者としての思いなどを、まっすぐな言葉で紡いでくれました。

#### 衝撃を受けた美大生の現実が映画製作の衝動に。

私が脚本・監督・主演を務めた『Ribbon』は、もともと自分の中にあったリボンに埋もれている女の子の映像イメージ、そして、ブツ切りで書き留めていた会話の一部がもとになっています。頭の中で描いていたものを映画にするならと想像する中で、主人公は自分が憧れていた美大生にしようと決めて、そこから美大生のことを調べ始めました。すると、当時コロナ禍で卒業制作展が次々と中止になっていることを知り、たまたまインターネットで目にした「1年かけてつくってきた自分の作品が、ゴミのように思えてしまった」というインタビューに衝撃を受けたんです。そんな美大生の現実に触れて、「今、映画をつくらずして、いつつくるんだ!」と衝動に駆られ、脚本を書き始めました。

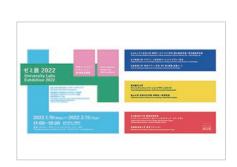


#### Ribbon

青春を奪われていく美大生たちの悲しみを目の当たりにしたのんさんが、世の中の擦り切れた思いを少しでも救い上げたいと企画した、初の劇場長編監督作品。のんさん自身が演じる浅川いつかは、コロナ禍の影響で卒業制作展が中止に。作品を家に持ち帰るが、心はモヤモヤと晴れず、制作は進まない。父母、親友とぶつかりながらも、自分の心を見つめ、いつかは未来をこじ開ける決心をする。コロナ禍に苦しんだ人たちの心に寄り添い、光を照らす美大生の再生物語。2022 年 2 月25 日テアトル新宿ほかロードショー。

©「Ribbon」フィルムパートナーズ

ちょうど脚本に手をつけた頃に出会ったのが、東京ミッドタウン・デザインハブで開催していた『見のがし卒展』。私が足を運んだのは、多摩美術大学と武蔵野美術大学の2校の展示だったのですが、最終日で多くの卒業生、大学院生、先生方が現場にいらっしゃったんです。そんな中にいたら、もう話を聞かずにはいられなくなって、「お話を聞かせてください!」と思わず突撃しちゃいました。



#### ゼミ展 2022

『ゼミ展 2020 見のがし卒展』が、のんさんの心を動かし、『Ribbon』の制作につながった。2022 年の展覧会では、デザインを教育・研究する7校の協力の下、各校で行われている課題、学生作品を通して、現在の学生がどのようにデザインを学んでいるのかを紹介。コロナ禍に見舞われた2年の間に、取り組まれたテーマ、新しい学びの手法などを目にすることができる。東京ミッドタウン・デザインハブにて、2022 年 2 月 15 日 (火)まで開催。

学生の中には、決まっていた就職の内定が取り消しになって将来に不安を抱えている方がいたり、卒展の中心的存在として動いていて、何とか頑張ってつくった作品を見てほしいと奔走したけれど、叶わず悔しさを押し込めていた方もいたり。車や建築のデザインを専攻している学生で、卒展に向けてつくっていた大きな模型を展示する機会を失って、泣きながら自分の作品を壊したエピソードも聞きました。もう見てもらえる機会はないのかなと諦めていた中、『見のがし卒展』というチャンスが巡ってきて、本当に報われたと話す姿もとても印象的でした。



published\_2022.2.16 / photo\_tada / text\_akiko miyaura

#### 声に出せないモヤモヤが少しでも報われてほしい。

私自身も、コロナ禍に主催していた音楽フェスを中止する決断をしたので、学生たちの悔しさや苦しさが手に取るように分かる。すごく共鳴して、「私はこれを伝えなければ!」とより映画製作への思いが強くなりました。もちろん、フェスを中止する時にはいろんな思いがよぎりましたが、社会人の私は他にやれることもあるし、生配信に切り替えて実現することも、映画を企画してつくることもできる。でも、これから未来に旅立って、何者でもない自分から何者かになっていく学生にとって、今、その場所でしかできないことがある。そこで過ごす1年、2年って本当に大事な時間。私たちとは、まったく違う意味を持つものだなと感じました。

きっと、たまたまコロナ禍に卒業を迎えたことに、「なぜ自分たちだけ」って不平等に感じたこともあると思います。でも、それを声を大にしては言えない空気があるのも確かで。やっぱり、医療従事者の方々や実際に命を脅かされている方がいることを考えると、言えないですよね ......。ただ、このまま学生生活が終わってしまったら、つくりたい、見てもらいたいというモヤモヤだけが渦巻いて、みんなの中にずっと残ってしまうんじゃないか。その悔しさや悲しみが少しでも報われてほしいなって。そんな気持ちで、映画製作に臨みました。

#### リボンはネガティブな感情をポジティブに昇華する。

『Ribbon』で描いているのは美大に通う、浅川いつか(のん)や、いつかの親友・平井(山下リオ)たちの物語です。まさにコロナ禍で卒業制作展が中止になって、いつかは作品を家に持ち帰るしかなくなってしまった。いろんな感情が渦巻いて何も手につかず、平井ともぶつかってしまう。いつかはずっと怒りやモヤモヤと戦っているけど、その感情ってなかなか人前では出せないじゃないですか。でも、私はそういうマイナスな感情も、大事にしなきゃいけないなと思っているんです。いつかや平井も制作を制限されて、「何のために、自分はつくっているんだっけ?」とモヤモヤを抱えて悩んだからこそ、自分がやりたいことが明確になった。そして、未来を自分の手でこじ開けようと前に進めたんですよね。

劇中ではタイトルでもあるリボンが、いつかの感情を表すものとして登場します。ネガティブな気持ちもリボンで表現すると、ポジティブに昇華されるのが私はすごく好きで。悔しいと思ってよかったんだ、怒ってよかったんだと、受け入れられる気がするんです。浮遊したり、塊になったりしたリボンの存在は一見不気味だけど、一つひとつはかわいくて、アートにもなる。リボンの持つ力ってすごいなって思います。今回リボンで表現した微妙な感情や、言葉にならないモヤモヤみたいなものって、今の時代、人に伝わらなくなっている気もして。だからこそ、他人の思いを汲み取ったり、察したりすることの大切さも、作品や言葉で示すことが大事だなと感じます。

#### 改めて気づいた。伝えなきゃ、伝わらない。

今回、モノづくりをする中で痛感したのは、「伝えなきゃ、伝わらない」ということ。ミーティングを開いて、自分なりにスタッフさんに伝えてはみるものの、なかなかうまくいかなくて。「どうして、みんなは私の頭の中をのぞけないの?」と、モヤモヤしたこともありました。もちろん頭の中をのぞけるはずはないので(笑)、言葉にするのが得意じゃない私は、言葉以外の会話で伝える術を考えないとまずいな、と。資料を集めてイメージを伝えたり、自分でつくったイメージボードを見せたりしながら、共有するようにしていましたね。伝えることの難しさがあっても、対策を考えれば伝えていけるというのは、今回の気づきのひとつでした。



#### イメージボード

映像や作品のイメージを伝えるために、のんさん自身がイラストやコラージュでボードを制作。例えば、予告でも流れるいつかがリボンに埋もれたシーンなら、光のイメージやリボンの色合いなど、より具体的に伝わる要素を盛り込み、スタッフへの説明に使用していたそう。「説明だけを聞くとファンタジックな世界に感じるけど、日常の風景の中にこういう人が出てくるという絵やコラージュを見せると異様な世界ではないんだ、とわかってもらえる。目に見える形にすることで、ファンタジー具合も伝えやすいんです」とのんさん。

みなさんの力を借りながら、いろんな思いを乗せて撮った映画なので、少しでも誰かの救いになればいいなと思っています。この作品はコロナ禍を目の当たりにするリアルな現場の話ではないけれど、きっと渦中にある感情的な部分を切り取ることはできたのかな、と。そういう意味では、今を記録していく映画になったんじゃないかと思っています。



published\_2022.2.16 / photo\_tada / text\_akiko miyaura

#### 自分が好きなものを知ることは、生きる上での支えになる。

映画『Ribbon』の制作に向けて動き始めた頃、世の中ではアートやエンターテインメントは、不要不急なものとして扱われていました。映画の中に「世の中の人達みんな、芸術なんかなくたって生きていけるんだって」というセリフがあるのですが、それを職業にして生きている私にとっては、必要ではないものとされるとすごく悔しくて ......。でも、本当に不要不急なのだろうかと考えることが、結果、自分を見つめ直す機会にもなりました。考えてみると、映画や演劇、音楽、アートからたくさんの影響を受けて、今の私は形づくられているんだなと実感したんです。アートやエンタメは直接生死に関わるものではないけれど、私を生かしてくれるもの。そういう意味では、心の生死に関わっていると言えるのかもしれません。

改めて自分はアートやエンタメをやりたいんだと再確認できて、自分が思っているより遥かに私にとって大事なものなんだということにも気づきました。うまく言えないけど……"好きの量"が分かった期間だったのかなって。好きな気持ちを自分で分かるのってとても幸せで、いいことだなと思うんです。『Ribbon』で私が演じたいつかも、ただただ絵が好きで一生懸命やってきたけど、ある意味、情熱だけで突っ走っていた。でも絵を描くことが阻まれた時に、改めて自分は描くことが本当に好きで、この先も描きたいんだって気持ちが定まっていくんですよね。

表現する側でなくても、好きなものを知るってとても大事だと感じます。例えば、「私はこの 絵が好きなんだ」って自分の心が動くものが分かると、自分を支えるものになっていく。自分 の輪郭がはっきりしてくると、やみくもに生きていたのが、「自分はこうやって生きていきたい のかも」って見えてくる気がします。アートに触れて気づきを得ることで、自分の日々の過ごし 方とか、生き方が定まっていくのって、きっと心地よいんじゃないかなと思います。

#### 美術館でアートを見ること、街中で草木を見ること。どちらにも発見がある。

美術館でアートを見るのが好きなので、森美術館や国立新美術館の展覧会に足を運ぶことも多いです。美術館に行くと、長居しちゃうんですよ。好きな展示でも、そんなに自分には刺さらない展示でも、一つひとつ考えながら見るので、気づけば時間が経っていたということがよくあります。

六本木の美術館は、建物自体も近代的なデザインで面白いですよね。国立新美術館のガラスのカーテンウォールは、何度見ても「うわ、ウェーブしているなぁ」って圧倒されちゃいます。若い頃は、「自分は六本木なんかに行く人間じゃない。静かなところで野暮ったくいたい」って思っていましたが(笑)、年を重ねるごとに素敵な美術館やおいしいごはん屋さんを知って、「こんな素晴らしい街だったんだ」と印象が変わっていきました。今は、おしゃれな大人の街というイメージです。

美術館で作品を見るのも楽しいですが、昔から外で草木を観察するのも好きなんです。「なんで、ここにタンポポが咲いているんだろう?」と、不思議な場所に生えてきた植物を探したり、名前はわからないけど、「これ、好きだな」と思う草花を見つけたりするのが楽しくて。別の場所で同じ花を見つけると、「ここにもあった!」と嬉しくなりますし、「公園といえばこの草。定番ですよね~」と若干の偏見を持って観察するのも面白いです(笑)。



published\_2022.2.16 / photo\_tada / text\_akiko miyaura

#### 宇野亞喜良のリボンが原点。今では表現する上で大切なモチーフ。

草木といえば、先日まで開催されていた沖縄の『やんばるアートフェスティバル 2021-2022』で、ガジュマルの木にたくさんのリボンをつけてひとつの作品にしました。自然 とリボンの共演は、すごくパワーがあって楽しかったので、ぜひ六本木でもリボンアートをやってみたいです。「こんなところに雑草が!」と近づくと実はリボンだったとか、「何だ、あれは?」って思うような不気味な物体が、よく見るとリボンの集合体だった、みたいな感じで。すごく興味があります!



#### やんばるアートフェスティバル 2021-2022

やんばるの大自然と芸術を楽しむアートイベントとして、大宜味村や国頭村などを有する沖縄本島北部で毎年開催されている。5回目の今年はのんさんも参加し、《ちょうちょとガジュマル》という作品を制作。ホテルの庭にある大きなガジュマルの木に、真っ赤なリボンを蝶々のように張りめぐらせた。2021年12月18日(土)~2022年1月16日(日)開催。

リボンは私にとって、めちゃくちゃ大切なモチーフなんです。女の子の絵を描くとリボンをつけることが多いし、恐竜の絵にもリボンを付けちゃうくらい大好き。リボンが好きになったのは、宇野亞喜良さんの絵がきっかけでした。かわいいリボンをつけた女の子だけど不機嫌な表情をしていたり、エロティックでセクシーな雰囲気の女性がキュートにリボンで着飾っていたりするのが魅力的で。色に関しても、宇野さんの影響が大きいですね。以前はデッサン画のように鉛筆でモノクロの絵を描いていて、自分は色を付けるのが苦手だと思っていたんです。でも、宇野さんの絵に出会ってから、「なんてかわいいんだ。私もこんな風に色を付けたい!」と、クレパスや水彩で描くようになりました。

#### "かわいくて狂暴"な女の子のパワーが大好き。

リボンって、かわいいのに集まるとグチャッとして、ゴミのように見えたり、不気味なものに見えたりするのが面白くないですか? そもそも、私はかわいいだけじゃないものが好きで、女の子のパワーに惹かれるのも " かわいくて狂暴 " だから。そう考えると、リボンアートだけじゃなく、女の子を集めてアートイベントをやるのもいいですね。例えば、道路にペンキをベシャッと塗り付けて、ひとつの絵をみんなで描くのも楽しそう。六本木は汚しちゃいけない街のような気がするからこそ、街自体に思いきり絵を描いてみたくなります。ひとつのものを全員でつくり上げるのもいいし、それぞれが街のあちこちで絵を描いて、実はひとつに繋がっているというつくり方もいい。ちなみに、女の子のイベントと言いましたけど、女の子のパワーに共感してくれる人なら、性別は問いません! やりたい人、みんなでつくるのが私は好きなので。みんなで明るいパワーを集めて、六本木の街をカラフルなアートで染められたら面白いですね。

そういえば、以前訪れたメキシコのグアナファトという街が、すごくカラフルでパワーに満ち溢れていたのを思い出しました。家1軒1軒の壁が鮮やかな色にかわいく塗られていて、街中にはアートが点在していて。しかも、ごはんもおいしいんですよ。炭がまわりについたチーズがおいしすぎて、あのチーズを食べにまたグアナファトに行きたいくらい。魅力がたくさんあって、大好きな街です。



#### グアナファト

メキシコ中央に位置する州都。スペイン植民地時代のコロニアル建築などの建物と石畳が残る街並みは、1988年に世界文化遺産に登録された。

(C) Tokyo Midtown Management Co., Ltd. All Rights Reserved.

そして、2022 年が始まりましたが、私が今、興味があるのは体づくり。突然アートやエンタメから離れちゃいましたが(笑)、いろんなお仕事や表現をするためには、やっぱり体力が必要だな、と思うんです。特に、昨年はアクロバティックな動きが必要とされる舞台に出演したりもしたので、より体力の必要性を感じました。明るくパワーのあるアートやエンタメを届けるために、体力や筋力をつけてパワフルに動ける体を手に入れられたらなと思います。

撮影場所:東京ミッドタウン・デザインハブ『ゼミ展 2022』展(開催中~ 2022 年 2 月 15 日)

#### 取材を終えて.....

のんさんをコメディエンヌと評する人がいますが、それはコメディをうまく演じるという意味合いより、本来滑稽でコミカルな生き物である人間を、とてもチャーミングに愛おしく伝えてくれる人という感覚が近い。『Ribbon』を拝見して、そんな風に感じました。誤解を恐れず言えば、決して言葉を自在に操る人ではないけれど、一つひとつの言葉に突き刺さるような熱と確固たる意志、優しさが宿っている。だから、人は彼女に心揺さぶられ、惹きつけられるのだと思います。(text\_akiko miyaura)

デザインとアートと人をつなぐ街に